

「子育て支援」の実践と課題

— 臨床心理士に求められる親支援 —

教育学部臨床心理学科 東山弘子

1 親支援の基本的理念

現代日本において急激な社会の変化がもたらしたものは豊かさや進歩だけではなく、それにあう心の問題であった。なかでも家族の形態、関係の変わり方は意識できない速さで進行し、誰もがどう対応していいかわからなくて戸惑っているうちに、不安が現実化する現象だけが先行して社会を震撼させるところまでできてしまっている。つい最近も幼い兄弟が、父とともに同居していた男に虐待をうけ、殺されるというやりきれない事件が報道された。背景には、母と父と子どもという核家族が崩壊したのちの父親と子どもの生きていく環境の厳しさは想像を超えるものであったと思われる。その他のケースをあげるまでもなく、これだけ物質的な豊かさを享受する一方で、心貧しく、不安をかかえることになるのは皮肉なものである。

子どもの問題、家族の問題、学校の問題がこれほどに深刻化すると、子育てに行政が関与し、あちこちで家庭教育の必要性が叫ばれ、母親、父親の役割についての論議も盛んになっている。しかし、日本的家族意識、地域構造によって成り立っていた子育て環境と、日本の伝統的関係の断絶してしまっている現代の子育て環境はまったく異なっている。社会の変化のスピードがはやすぎて心が追いついていけないことが混乱の元になっているように思われる。従って、親、母、父は「かくあるべし」という画一化された理想イメージに基づく理論構築や、子

育ては昔に戻るべきであるという論調は危険である。母性神話に閉じ込める危険性やよい親悪い親という評価のみかたにとらわれる危険性がひそんでいるので、それは絶対に避けなければならない。われわれ自身がそういう固定概念にとらわれない立場に立つことによって、個々の親、子、家族の生きる姿が見えてくるような支援でなければならない。個人に焦点をあわせていくことで、なにが布置されているかが見え、全体が見えてくるところに、心理臨床の理念が活かされるのである。この点は親支援を考えるときにとくに重要な視点であると思われる。

親たちが不安で、どうあるべきかと先が見えない今だからこそ、また臨床心理士に特化した支援を求められている今だからこそ、踏ん張ってじっくり「親であること」「子育て」をめぐるなにをどのように支援できるかについて子育て支援論を構築するぐらいの気迫で議論し、事例を積み重ねる必要があるのではないかと思う。そんな悠長なことを言っている場合ではないという先生方の声ももっともであり、現実的な方法論が求められている切実な状況であることも事実であるが、一方では臨床心理士としての確かな支援の中身を理論構築しておかなければ脆弱なものに終わってしまう懸念がある。

筆者は基本的に親支援は思春期までを包括するものであると考えているが、狭義には学齢期までを対象とするのが一般的である。とすれば、母性が優先する母親支援が第一の課題であるこ

とになろう。もちろん父親支援も大きな課題であり、同時に家族支援でもあるといえるのである。

子どもの幸せを願わない親はいない。しかし、子どもの心が見えず、親として子どもとともにいけることが幸せに感じられなくなっているのが現代である。母である女性が「母である現在」に幸せ感を抱けるようにすることが親支援のひとつの核であるといえるだろう。

2 親支援が求められる臨床心理学的背景

(1) 家族の崩壊

敗戦からの焼け野原から立ち上がったわが国は、戦後一貫して経済的發展と国際社会へ仲間入りする努力を続けてきた。1960年代からの経済發展は、世界から奇跡の復興といわれ、發展途上国のモデルにされ、“Japan as number one”と言われるまでになっていった。

1990年のバブル崩壊は、顕在的には経済的崩壊ではあるが、この下地として教育の崩壊と人間性の破壊があった。教育の崩壊と人間性の破壊は、バブル崩壊より10年早くその兆候を見せていた。不登校の激増、学級・学校崩壊、家庭崩壊と家庭内暴力、児童虐待と子育て放棄、少女売春、衝動的犯罪と殺人の増加、シンナーや薬物の蔓延、等々教育と人間性の崩壊は、経済的破綻と同等あるいはそれ以上の重要な問題をわれわれに提起している。

それは家族の崩壊である。家族の崩壊は、意識できない速さで進行し、誰もがどう対応していいかわからないままに戸惑いと不安を抱えているのが現在である。

なぜこのようなことになってしまったのだろう。1970年代に家族幻想そのものが急速に風化し、結婚だけが夢ではないという生き方を実践しだし、家庭内暴力をはじめとして家族のいろいろな崩壊現象がでてきた。70年代後半から80

年代は、新しい家族形態としての核家族を享受し、求め続けてきた「豊かさ」を享受する背後で影の現象が徐々に進行した。90年代にバブルが崩壊して、急激な価値観の変換がおこると、離婚、子育ての不安や放棄、学歴進行からの離脱などが普通のこととなった。親にとっても子にとってもなにがよいことなのか、さっぱりわからない時代が到来した。家族の崩壊は家族幻想の崩壊というにとどまらず、おおきな生活、意識、組織、生きかたの再生を引き起こしている。

(2) 子育て環境の変質

日本の伝統的な子育て観は、植物（農作物）を育て、育つことのアナロジーで捉えられていたようである。事実、江戸期の育児書は、たびたび子どもの育つ様子を植物にたとえているし、また明治期には、養蚕と子育てを類比させているものもある。これも「育てる」営みの共通性を捉えているのである。「育てる」行為で最も重要なのは、育つという自然の営みを中心におくことであろう。それは手をふれることのできない領域であり、あえていえば神様に頼むほかない領域である（横山浩司）。それに対して、工業化と都市化の中での近代的育児は、むしろ工と商の倫理、つまり「作る」と「売る」によって捉えられるようになっていったと言えよう。昭和の初期でも都市で子育てされていた方々のお話は、どこかJIS規格のような標準を意識し、こうやったら良いか、ああやったら良いかと工夫し、それなりに能動的に働きかけてゆく姿勢が感じられる。そこには、子どもが育つことへの、あるいは育つ子どもへの基本的な信頼を失いかける契機があったように思われる。その上、昔は、子育てに関わる親は、もっとたくさんいた。出産のときの「トリアゲオヤ」からはじまり、はじめての乳をもらう「チオヤ」、名前をつけてもらう「ナツケオヤ」などは、日本全国

にひろく見られた習わしであった。こうした複数の親子の結合が、共同体のひろがりが出ていて、子どもはこの結びつきの中で育てられていったのである。地域社会が子育てを支援していると、子育ては容易になる。親の子育て上の歪みが自然に緩和されるからである。現在の子育ての難しさの一因が、地域社会の崩壊にあることがわかる。

男女平等思想の普及は、女性の能力による社会進出を豊かにし、女性の働く意識を変化させた。夫婦と子どもによる核家族は、夫は仕事、妻は家庭という性別役割分業によって経済機能を夫に一任し、家庭機能を妻に一任することでなんとか維持されてきた。それは三世代同居家族のしがらみから嫁を開放し、夫婦単位の家族という新しい家庭の理想像とされた時代もあったが、「家庭のなかで居場所を失った夫と家庭に閉じこめられた妻という新しい問題を生じさせた。また、経済的な理由からであれ、自己実現の要求からであれ、多くの女性が家庭外の労働に出ようになり、性別役割分業にもとづく核家族は変化を余儀なくされている」(山下景子)。女性が働く理由の一つは、女性の教育レベル、野心、あるいは欲求不満によって、女性の感情がきわめて多様であり、能力のある女は仕事ができるし、仕事をしたくなる。女の従来の仕事とされた家事労働では、自分の能力が開花しないし、能力のある女は、それまでも男と同じように、あるいはそれ以上に勉強してきているからである。第二は、女性たちは、仕事を通して人間として豊かな体験をし、人格が豊かになっていく、このことのために働く。家庭から社会に出たのは、まず自分の人生を豊かなものにしたいという願いからであり、それが家庭のなかに反映することを望んでいるからである。子どものことはそっちのけで、なりふり構わず働くということではなく、働くことによって手に入れた家庭の社会化、開かれた家庭という姿

を土台にして、子どもたちに人生の意味を教え、人間的な体験を深めさせることができると信じて働くのだ。自己実現とか自己確立は、家族との関係から切り離れたところにはありえない。切り離れた場合、家族に何かが起こる。共働きはバランス感覚である。現在は、子どもを産み、育てることが、あくまで個人の自由意思にゆだねられるかわりに、今度は、育てることも個人の自由と同時に責任であるというのが、いまの自由競争社会である。家庭の外で働く母親がかかえる第一の問題は、三歳以下の子どもの保育である。この問題には二つの側面がある。子どもを誰に預けるかという物理的側面と、子どもが果して幸福であるかという精神的側面である。そして、子どもにとっての母性のところでも述べたが、働く母親たちは、子どもによって個人差はあるにしろ、現実子どもにとっての精神的危険を犯しているのである。というのも、変化によく適応する子もいれば、適応しない子もいるし、脆い子もいれば、それほどでもない子もいる。明治時代以来、わが国では社会の関心は子どもに向いてきたが、現代の社会は『子ども中心主義』的ではなくなってきているように思われる。

普通の父子間の相互交渉や父親のしつけに関する研究をみると、父親には母親と質的に異なるはたらきかけがあり、それが子どもの発達にとって母親からの働きかけに加えて重要であることは見逃せない。子どもの知的発達、特に男子の知的発達に父親不在がマイナスの影響をもつことを示すものが多い。子どもが成人するまで父は必要な存在である。しかし、ひとたび子どもが独立すれば、父親の必要性は確実に下がる。このような打算から、長い間離婚を思いとどまっていた妻が、熟年離婚を求めるのかもしれない。離婚した場合に父が子どもを引き取るケースが最近増加していることも周知のとおりである。文頭に述べた先日の幼児殺害も二所帯

の父子家庭が同居していた事例であった。この事件では「母」についての報道や追求がほとんどみられず、良くも悪くも新しい時代を感じさせるものであった。子にとって父とは誰か？という大きなテーマは今後の課題である。昨今の「マザーファーザー」の出現は今後を考えるキーワードになるのではないと思う。

(3) 子育て環境の崩壊

本来、子どもを産むことは自然なことであり、プライベートなことであった。しかし現代において子育ては国を挙げて真剣に取り組まねばならない課題となった。これほどに難しい課題になろうとは誰も想像できなかった。いま女性たちは、どのような意思のもとに、子どもをつくり、身ごもり、育てるかを意識的な課題とするようになった。現代の女性は、「子どもを産み育てることの中でこそ女性は成長する」という伝統的な価値観と、「子どものために、家庭に閉じこめれば、女性的人間的成長は止まる」という新しい価値観がともに存在する、混迷の状況に生きている。「いつも家にいる母親」＝「よい母親」という世間一般のイメージは、実は子どもが特定の個人と強い絆を必要とする発達段階にある時にのみ妥当性をもつ。それはせいぜい三年である（矢野隆子）という変化は、家族内老人福祉を原則としなくなった現代の経済上の理由と考えられなくもない。

現代女性が個性を確立するという生き方と本能は逆方向であるような気が筆者にはしている。心の中の母性を否定し、出産し子どもをかかえながらも現実感が薄く、生物的感情に素直になれない、自然の心の流れに従えない、子どもに対して自然な愛情を表出することができないという、心の乖離がおこっているように思われる女性が現代では多く見られる。現代文化は、わが子に対する素朴な愛情の表出をも阻止するように働いているのかもしれない。

母性の二重性は慈しみと虐待である。心理的に自分の子どもを虐待する行為は人間だけに見られる現象である。人間以外の霊長類の親も、時々自分の子どもを罰するが、親自身が社会的に孤独で育てられた場合や檻でのストレスのため行動が異常になっている場合でない限り、子どもにむごいことをすることはまれである。

虐待を受けた子どもに共通するのは、過度の攻撃性・貧困な自己概念・他者を信頼する能力の欠如・人間関係における逸脱行動・不適切な愛着行動、およびディタッチメンであり、虐待傾向のある親の特徴として衝動性や攻撃性の高さが、そして虐待を生じる家族には社会的な孤立傾向があることが見出されている。

過保護の母親、娘気分の母親という両極端に共通して欠けているのは、社会的視野であり、「社会的視野をもった母性がなければ、子どもをとりまく環境はよくならない」と矢野も指摘しているが、これは従来父性の役割だったはずである。父性の欠損が母性に過大な役割まで押しつけているのが現代かもしれない。

(4) こどもの心の崩壊と再生

先述したように、バブルの崩壊は、われわれに好むと好まざるに関わらず、生きる価値観の変更を強いられるものであった。70年後半以降に親となった人々は、日本の伝統とも言うべき文化や価値観から切り離されたところで自分たちを支えていたはずの新しい価値観や核家族という家族幻想も風化してしまった。リストラや中年の課題その他もろもろをかかえて、なにをすればいいか、まったくわからなくなってしまったのである。こどもにたいしても家庭内暴力や不登校をはじめとして進学、善悪の判断に至るまで、親としてどうあるべきかがわからなくなってしまった。離婚や少子化、虐待などは、子供の対人関係の発達を阻害し、こどもの不安定を引き起こし、深刻な心の崩壊を招いている。暴

力や非行、そして不登校と際限のない問題の拡大は、われわれを不安にする。一人一人が幸せ感を持てるような社会にするためにわれわれ大人は何をすべきかを真剣に考えるのが責務であろう。その一方で、だめになったという現実を受け止め、学歴志向や古い価値観からの離脱を始める若者たちが着実に生まれていることも忘れてはならない。

3 家族への支援

第一はとくに子どもの発達初期は子育てに主として関わる「母」への支援がかだいであろう。人間の場合は、実母だけが母性を持っていたり発揮できたりするのではなく、子どもに愛情をもって関わる大人の全てが母性的行動をすることを可能にする。このことは逆に、実母であっても、何らかの要因により、難しい子育て（難しい子ども）に当たった場合や母親に母性的行動が学習されていない場合は、母性的行動が取れないことがおこる。野性動物の場合でさえ、第一子に対しては、母親は不器用で、子育てが下手なことが確認されている。体験を積みほど子育てがうまくなる。また、育児経験者の指導によって、育児行動が改善され、母性的行動が子どもに伝達されやすいことも知られている。現在さまざまな子育て支援が工夫され、実施されている。いずれも母が孤立しないでひらかれた子育てができる環境を提供しようとしている。筆者は、母である女性が「母である自分の現在」に幸せ感を抱けるようにすることが子育て支援の核心であると信じて疑わない。個人が幸せに生きることが社会全体の福祉につながるという考えが浸透することが現代社会に求められている課題である。

第二は「父」の子育て支援についてである。子育ては男である自分のかかわることではないという伝統的価値観を受け継いでいるか、ある

いは蓄積がないために気持ちはあってもかかわり方がわからないので母である配偶者の指示に従い、母のやりかたをコピーする父が多いようにおもわれる。このように父が参加しなければもはや孤立した核家族における子育ては限界にきているのが現在であり、好ましい現象ではあることは確かではあるが、正高教授が指摘されているように、父性というよりも第二の母の機能を果たすことになっていないかという点について考えなければならない。そのような母を正高教授は「マザーファーザー」と呼んでおられるが、このことは子どもの健全な発達を促す親の機能として検討するべき課題であると考ええる。

第三は、家族のありかた全体を視野にいて助言し、支援できる存在である。祖父母の機能、そしてスクールカウンセラーと同じイメージで捉えることのできる「保育カウンセラー」の職能を確立させるべきであろう。

4 親支援の内容

親支援は、伝統的心理臨床の中心的活動であったし、これからもそれは変わらない。しかし、前述したような理由で親支援はもはや伝統的な心理療法の形ややり方を超えて社会に出て行くことが要請されている。いうまでもなく厚生労働省の子育て支援のシステムのなかで臨床心理士ができる実質的な親支援の仕事は多い。そういう親支援も大切な領域であるが、いまここで考えるべきことは、スクールカウンセリングが定着していった歴史に学びながら、臨床心理士に特化された内容の支援を「いつ、どこで、誰に、どのような」形で実施するかについて理論構築を行うことである。

1 親は何を支援として望んでいるか

筆者が以前に幼稚園の親に対して行った調査によると、以下のような結果を得た。

(1) 子育てに関する疑問

最も多かったのは、日々接する生活レベルの子どもに対する疑問、たとえばしつけ、友達関係、兄弟関係、しかり方などについて具体的な対応を求めるものである。困ったとき誰に相談するかを聞くと、「夫」と答えているのが90パーセントに達し、インターネット、友人がそれに続く。実母や姑などはほとんどなく、身近な子育ての経験者が相談の相手に選ばれていないのが現実である。

朝日新聞に連載されている臨床心理士会の「アスハラ子育て相談」に寄せられる相談内容からも、相談する相手を切に求めながら一定の条件に合う人でなければ相談はしないという傾向を感じ取ることができる。そのような現実から、「親代わりを果たせる親しい他人」による支援が求められる。かつ、相談されても困惑するばかりの夫を支援するような「核家族への支援」が必要である。

(2) 発達障害の理解

親は誰でも、自分の子どもの発達について不安を持っている。インターネットで調べたり、身近の他子と比較して判断しているようである。発達障害について相当高度なレベルの知識を持っているひともし少なくない。しかし、そのことが必ずしも子育てによい影響をもたらすとは限らない。子育て支援担当者の理解も心もとない現実もある。特別支援教育を充実させようという方向性が打ち出されている現在、不必要な不安を取り除き、有効な支援につながる理解を親にも支援担当者にも浸透させる努力が求められているだろう。

(3) 母親であることをめぐるメンタルヘルス

母になりたがらない女性たちについてはすでにさまざまな分析がなされているが、虐待、子育て拒否のケースは増加する一方である。孤立感からうつ、神経症を発症するケースや働きたい欲求を抑圧している被害感をつのらせ、夫婦

関係を悪化させているケースなども多くなっている。母が「母であることに幸せ」な実感をもてない状態はこどもにとっては不幸なことである。こどもにとって必要だから〇〇しなければならないという要求は辛いだけで、子どもの存在が自分の幸せをうばっているものに思われてくる。子育てのエネルギーは、母であることを喜べるところから湧き出てくる。母にとって子どもの存在が必要であるとの感覚を育てることもわれわれ臨床心理士の重要な使命であると筆者は考えている。

(4) 親の神経症

親自身の抱える人生の課題、神経症に対するセラピューティックな対応の機会を子育て支援の範疇にくわえることが必要であるケースがあり、機関との連携の必要性を論じなければならない。筆者の体験では、ある幼稚園で多重人格症状を持つ母への対応に四苦八苦したケース、医師にかかり、筆者のカウンセリングをうけているが、夫とのけんかで不安になって女性センターへ電話をかけたところDVと判断した相談員に勧められて即母子寮へ入所したケース、離婚訴訟で親権を争っているケースなど、教育機関、精神科医、地域との緊密な連携をしなければ全体の情報がなく、一部の情報だけで判断しているととんでもない方向へ行ってしまう危険性がある。

(5) 離婚、夫の子育て不参加、

離婚直後、単親家庭の問題、父の子育てのあり方についての議論も今後の課題である。正高教授の指摘は重要である。すなわち、日本の場合、いまのままだと、第二の母を生んでいくのではないかという意味で「マザーファーザー」という概念を出しておられるのである。教育だけでなく、日本文化全体に欠けるものとして「父性」が指摘されている。

単親家庭が増加するなかで、子育て支援は大きな課題である。

2 支援システムの構築

子育て支援はソフト面だけではなく、ハード面も重要である。すなわち、臨床心理士が独自に実施できる親支援のシステムを構築することである。多くの研究者が模索をするなかで、行政レベルでの支援のひとつとして、カナダのプログラムが日本で実施され始め注目されている。定着し、効果をもたらすことが期待されている。その他にもNPOによる地域支援、市町村によって設定された子育て広場の拡大、リタイアされた先生経験者が個人的に立ち上げたボランティアグループなどがすでに活動している。今後その知恵を寄せ集めて理論構築へと進んでいきたい。

3 保育者、支援担当者のスーパーヴァイズ

臨床心理士に強く要望されているものであり、毎年全国研修会でそのノウハウを蓄積しているところである。保育カウンセラーの設立をも視野に入れてかんがえるべきである。

4 行政との連携

子育て支援ワーキンググループのたちあげにより、さまざまな活動と方向性が見えてきている。経験をつみ、知恵を集積する中で、確かな歩みをしていかねばならない。

以上、親支援に関する試論を述べた。課題が羅列されたに過ぎない感もあるが、要請されている親支援の今後の方向性を確認することができた。地道な活動と研修の蓄積が今後に求められる課題である。

